



【研究室の窓から】

大学の知と人間中心主義

山 田 勉

.....

はるか昔に古い大学の門をくぐって、あれこれしている内にいつのまにか老教授となっており、退職年度を迎えた。長い年月の終わりとしては派手過ぎる強烈な感染症のパンデミックに送られて、4年生の学生諸君とともに卒業することになる。

法学部の大学院で日本法制史を専攻し、江戸や明治の法と裁判の実態を研究することに夢中になり、教壇に立った時は、正直に言って教えることには興味もなく、研究を続けるための手段だと思っていた。若気の至りとはこういうもので、教えることで教えられたことも多いだけでなく、必要に迫られた講義準備が狭い視野を広げてくれた。今思えば貧弱な教員が、学生にどれほど支えられていたかがよくわかる。

大学というモデルはヨーロッパのものである。日本にも律令制下や高野山に似たものがあつたと言われるものの、現在の大学はその子孫ではなく、明治に導入された西欧の制度である。12世紀頃にはヨーロッパ最初の大学が開かれた。神の摂理に加えて、人間の所産をも研究するようになると、大学の学問の対象は広大になり、哲学や歴史学や自然科学などほとんど世界のすべてを相手にするようになった。

ヒューマニズム（人文主義）という言葉にはいい語感がある。人間を大事にすることには誰も反対しないからである。中世ヨーロッパでは神だけが価値の源泉だったのに、人間を尊重するという新たな価値が加わって、大学の知は次第に「人間にとっての世界」に向けられた。大学は神学から解放されたが、今度は人間中心主義にとらわれてしまった。

西洋史家の阿部謹也氏が、かつてドイツの学者フレデリック・フェスターの「こまどり一羽の価値」という仕事を紹介したことがある。その肉や羽の価値、鳴き声の価値、害虫を駆除する価値などを総計すると思いがけないほどの経済価値があるという計算を示し、おそらくは冗談交りに自然破壊に警鐘を鳴らした論考である。

氏は論旨に賛意を表した上で、「私が奇妙に思うのは、ここで問題になっているのは人間にとってのこまどり一羽の価値であり、こまどりに即しての価値ではない点である。」と述べ、こまどりにとっての人間の価値はどうなるだろう、またこまどりにとってヨーロッパ文化、特にキリスト教や近代的文明の所産はどれほどの価値があるのかと問うている。紹介の末尾は、この論考では「すべてが人間

にとっての価値として計られている。そこにも私は『ヨーロッパ』を感じざるをえないのである。」と結ばれている¹⁾。

同じような異和感を最近経験した。コロナ禍の中の在任最終年のゼミで、4回生ではイスラエルの歴史家ユヴァル・ノア・ハラリ氏の、3回生ではドイツの哲学者マルクス・ガブリエル氏の世評の高い本を読んだが、後者にはこの異和感が強かった。

ガブリエル氏はグローバル資本主義の害悪と、このままではその拡大を止めようがないことを指摘したうえで、新しいグランドセオリーが必要だと述べる。それには異論がない。

続いて氏は、現在の大学は資本主義労働の役割分担を模倣していると指摘する。経営学から持ち込んだ評価主義や質保証などという工場の品質管理のような言説が大学で大手を振っている現状からみても、これもその通りである。コンテキストには同意できる。

問題は、現状に対抗するために「すべての学問は、同じ一つの目標を持つべきです。その目標とは、『人間、そして人間の幸福（ウェルビーイング）の条件を理解すること』です。」と彼が主張する点にある²⁾。これは、学問の目標は神と神の摂理を理解することという、神を人間に置き換えた神学ではないか。彼の真意はこのような危機にあっては一時的にそうすべき、ということかもしれないが、そうだとすると学問を人間のコントロール下に置く発想は危険なおいがる。

ノーベルやアインシュタインは大量殺戮に手を貸そうとして研究したはずはない。AIの開発に懸命な研究者がディストピアを待望しているわけがない。事物を解明すると、それがめぐりめぐってどんな世界を開くのかは予測できないことが多いだろう。だからこそ学問は、解らないままに人類発生前の古生物やはるかかなたの宇宙や素粒子をも対象としてきた。その目標が人間と人間の用途に限られるとは何という矮小化だろう。

現代の危機がグローバル資本主義にかかわるものであることには多くの人が気づいている。これをもたらししたのは人間の選択ミスだろうか。人間だけを中心に考えて、こまどり一羽が死んでも、有毒物を川や海に流しても、巨大台風が来襲しても無視するような人間中心主義を疑うべきではないのだろうか。ニホンオオカミが絶滅し、山里の村も減ってイノシシやシカやクマの食害や人的被害が急激に増えている。すると害獣駆除である。野生動物を殺し続けることが本当に人間の生活を守ることになるのか。こまどりやシカから見た人間はさぞかし恐ろしい怪物だろう。

人が欲望のままにふるまってもそこには見えざる神の手がはたらいて秩序が生まれるとアダム・スミスは言った。彼には見えたその手が今ではもう見えないとすると、現代ではその手に代わるものが必要である。それは倫理道徳、それとも国家権力、宗教だろうか。

パンデミックでは、中国の人権無視の強権的抑え込み、ヨーロッパの軍や警察による都市封鎖、日本の自粛と様々な対応が見られた。共通するのは隔離とワクチン開発である。エボラ出血熱を始め、新しい病原菌やウイルスは、これまで人間があまり関わってこなかった地域から多く発生している。山からあらわれるシカを殺すように、病原菌やウイルスを殺していけば問題は解決するのだろうか。

日本の大学の土台にはヨーロッパの人間中心主義が組み込まれている。それが悪いというのではない。むしろわれわれはそのことによって多く啓発されてきた。ただその人間中心主義にもう少し自覚

的であってもいいのではないか。人間や生き物を含めた世界や宇宙を多様に多元的に考える輩でありたいと思うのである。

これを書いているのは年の瀬の研究室。今年も終わり、という気持ちに退職の感慨が重なって、中村草田男の「降る雪や明治は遠くなりけり」という句が思い出されます。

この句には、明治を知らなくとも、ある年代以上には共感できるものがあります。坂道を上ってきてふとふり返ったときに、遠くまできたものだと思をつく、その感じは大人なら誰にでもわかるからです。

長い時間をこの研究室で過ごしました。先生方、学生諸君に大変お世話になりました。有難うございました。

注) 1) 阿部謹也「鳥の価値」『現代思想』1983年10月号, 18-19.

2) マルクス・ガブリエル『世界史の針が巻き戻るとき』PHP 新書2020年, 153.